
私たちの想い【三語即興文：『詩』『憎しみ』『ハッピーエンド』】

オロチ丸W0632A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私たちの想い【三語即興文…『詩』『憎しみ』『ハッピーエンド』

】

【Nコード】

N9778E

【作者名】

オロチ丸W0632A

【あらすじ】

『私は詠^{うた}おう、憎しみの詩^{うた}を。私は叫^{うた}ぼう、既に捨てた夢を。私は呪おう、彼を殺した悪魔を。それが、私の最期の役目だから。』
最後は、ハッピーエンドです。

【優美】

私は詠^{うた}おう、憎しみの詩^{うた}を。

私は叫^うぼう、既に捨てた夢を。

私は呪^{のろ}おう、彼を殺した悪魔を。

それが、私の最期の役目だから。

あの時、どうして私は賢慈^{けんじ}を止めなかったのだろうか。

あの時私が止めていれば、賢慈はまだ生きていたかもしれぬ。

でも、あんな事が起きるなんて、思いもしなかった。嫌な予感がしたけれど、賢慈を送り出してしまった。

会社の得意先との、接待の釣^{つり}り。そこで賢慈は誤^{あや}って海に落ちてしまい、必死に搜索^{さくさく}したけれど、見付からなかったそう。

そう言う智博^{ちひろ}は、今まで何度も、賢慈と別れて自分と付き合^あって欲しいと迫^おってきていた男だった。そして、その接待にも同席^{どうせき}していた。

信じられる訳が無い。

智博が賢慈を突き落としたに決まっている。

何度迫^おっても私が拒^こむから、彼を殺して私を手に入れようとしたのだろう。

絶対に許さない。彼のいない世界に意味は無いけれど、この世界から消える前に、智博を地獄に落としてやる。

【賢慈】

まさか智博が、僕を海に突き落とすだなんて、考えもしなかった。優美ゆみに迫っていたのは知っていたが、もう諦めたと思っていた。

海の中で、息が出来ない。救命胴衣もつけていたのだが、何故か浮かぶ事が出来ない。細工でもされたのだろうか。

薄れていく意識の中で、優美の名を呼んだ。そして、いつの間にか意識を失っていた。

【智博】

思った以上に上手くいった。

賢慈の糸に獲物がかかったらしく、釣りに集中していた。

そんな彼を突き落とすのは、簡単だった。席の関係で、俺達の場合他の人から見えないし、救命胴衣にも細工してある。万が一にもこの事件が明るみになることはない。

一応搜索したが、浮いているものとして探しているのだから、海の中に消えた彼が見付かるはずも無い。後は、悲しんだ演技をしなから優美に迫るだけだ。

罪悪感など、全くなかった。

【優美の詩うた】

私は詠おう、憎しみの詩を。^{うた}

私は叫ぼう、既に捨てた夢を。

私は呪おう、彼を殺した悪魔を。

それが、私の最期の役目だから。

優しさの春も、情熱の夏も、変化の秋も。

みんな、凍てつく冬に消えてしまった。

もう、二度と来る事のない季節を思い出しながら、氷河期の中で消える私。

凍え死ぬ前に、悪魔を地獄に落とそう。

苦しむ悪魔を笑いながら、涙を流す。

涙は氷となって、私の心に突き刺さる。

そして私は、どこにもいなくなる。

【優美】

どうすれば智博を地獄に落とせるだろうか。

身体を使うのは、却下。賢慈以外には触れさせない。

コネもなく、お金もそんなに有る訳じゃない。

とりあえず、探偵を雇って調べて貰うことにした。

【賢慈】

死んだと思っていた。

でも、手は動くし、足も動く。お腹はグーグー鳴っているし、何より意識がはっきりしている。

奇跡的にも、どこかの島に流れ着いたみたいだ。

ポケットの携帯は、防水のだったからか、幸いにも生きていた。どうやら、海に突き落とされた日の翌々日の朝らしい。

早速、優美の携帯にメールをした。

GPS情報と共に、僕は生きていますよっと。電波状態が1本だからなのか、送信に時間がかかった。

さて、送信完了。これから、どうしようか？このままでは助けが来る前に飢え死にしていまいそうだ。

【智博】

何てこった。最後の大事な所で計画が上手くいかない。

彼を殺せば振り向いてくれる筈だったのに、振り向くどころか、直接会ってくれさえない。

前は、友達としてでも、笑顔を見せてくれていた。

もしかして、僕が彼を殺した事がバレてしまっているのだろうか。こんな事なら、彼を殺すんじゃないかった。

でも、もう、後戻りは出来ない。俺はどんな手を使ってでも、優美を手に入れる。

【優美】

とても嬉しい事が有った！

賢慈の携帯から、メールが来たのだ。

そこには、『僕は生きています。』という言葉と、GPS情報が記載されていた。

早速、賢慈に電話を掛けてみると、電波状況が悪いのか、つながらない。

メールだと、時間がかかるかも知れないけど、届くはず。彼のメールも届いたんだから。

何通かメールを交わした。間違いなく賢慈で、特に怪我もしてないみたい。

賢慈が無事に生きていてくれて、本当に良かった。嬉しくて、涙が止まらない。

『お腹ペコペコだ〜早く飯を〜（笑）』賢慈は食いしん坊だけど、こんな時でも食いしん坊なんだ。

思わずクスツと笑ってしまった。そこで、警察とかに連絡していない事を思い出す。

『賢慈の無事が嬉しすぎて、連絡忘れてた（汗）』そうメールして、警察に家の電話から連絡する。

メールのGPS情報も伝え、電話を切る。そして、賢慈とのメールを再開する。

『僕も、優美にまた会える事が嬉しいよ。愛してる。』……もう、何て恥ずかしいメールしてくるのよ！

『ありがとう。私も、賢慈をこの世で一番愛してるっ！帰ってきたら、キスで迎えてあげるから、後もう少し頑張ってね！』

……私のメールの方が恥ずかしいかも。

【賢慈の詩^{うた}】

僕は君に出会えて、本当に良かったと思う。

君に言ったら否定するだろうけど、君に初めて有った時、天使だと思った。

君があまりにも眩^ましくて、一目で恋に落ちた。

勇気がなくて、なかなか告白出来ないでいた僕の、背を押してくれたのは、一つの噂^{うわさ}だった。

君に、彼氏がいるって噂。結局、デマだったけど、この噂がなかったら、僕は告白出来ないままだっただろう。

もっとも、僕の告白を君が受けてくれたから、本当になったんだけれど。

この噂には、今でも感謝してる。

君と同棲どうせいするようになって、色んな君を知ったけど、どんな君も大好きだよ。

大好きな君と一緒に居れて、僕は本当に幸せだと思う。
どうか、この幸せな日々がずっと続きますように。

【賢慈】

『帰ってきたら、キスで迎えてあげる』という言葉を見て、ちょっとイタズラしたくなってきた。

『ありがとう。じゃあ、その後は優美を食べたいな。』きっと、真っ赤になって慌てていることだろう。そう思っていたら。

『良いよ。私を全部、食べちゃっても。私も、賢慈を食べたいし。』……今度は僕が、真っ赤になって慌てる番だった。

【智博】

優美達が住んでいるマンションの一室の前で、俺は優美が出てくるのを待っていた。右手には、新聞紙で包んだナイフ。

優美が出てきたら、これを突きつけて、近くに停めた僕の車まで連れて行くのだ。そしてそのまま、地の果てまで逃げてやる。

そう思っているのに、優美は出てこない。ピンポンを無視しているのか。

そうこうしている内に、出社時刻になっていた。上司から一通のメールが届く。内容は？

『山田君が出社時刻にいないなんて、珍しいね。体調でも悪いのかい？ 具合悪いんだったら、無理せず休みなさい。』

この後の文章を見て、俺は固まってしまった。

『それと、海に落ちてしまった新野木君にいのぎの事だが、奇跡的にも無人島に流れ着いていて、生存が確認されたそうだ。現在救助隊が向かっているそうなので、明日にでも会えると思う。君は彼の親友だと思って、先に連絡しておくよ。じゃあな。』

もう、俺に勝ち目はないと思った。賢慈が生きているなら、俺の事を警察に言うだろう。そうなったら、俺は終わりだ。

奴が親友だと？ そんな訳はない。彼に信用させるために、演じていただけだ。そうだ！

優美をさらって、優美を人質にすれば、賢慈は何もできないだろう。警察に言ったら殺す。そう言えればいいだけだ。

もう、時間が無い。どこにいるのかは知らないが、救助隊が奴に接触する前に、優美をさらわなければ。

もう一度ピンポンを鳴らそうとした時、警察のサイレンの音が聞こえた……。

【智博の詩うた】

最初は、友達の彼女。それだけだった。

でも、いつの間にか、俺にとっての女神になっていた。

女神を手に入れたいと、願ってしまっていた。

そしていつの間にか、それしか考えられなくなっていた。

君は俺にも微笑みを見せてくれたけど、彼にしか見せない顔も、見たいと思った。

その可愛い唇に、その綺麗な体に、触れたいと思った。君の心の中に、入りたいと思った。

でも、君の心の中には、いつだって彼がいる。

俺は、君にとっては友達にしかないということなのか。

だから、彼を消そうと思った。彼を消して、その隙間に入り込もうと思った。

結局は、君の心の中には入れなかった。友達でさえ、なくなってしまった。

もう、どうなったって良かった。どんな手を使ってでも、女神を手に入れたかった。

だけど、もう女神を見ることは出来ない。君の微笑みを見ることは出来ないんだ……。

さようなら、女神様。貴女の心に黒い感情を作ってしまった事を、後悔しています。

さようなら、我が友よ。女神との幸せを邪魔して悪かった。君が生きていてくれて、本当に良かった。

相手が誰であれ、女神の微笑みが絶えませんように……。それだけが、今の俺に願えることだ。

【優美】

智博は、殺人未遂の容疑で逮捕された。

警察の人から聞いた所によると、彼は刃物を持って私たちの部屋の前に立っていたそうだ。

あの時、もし部屋を出ていたらと思うと、ゾッとする。

その日の昼頃、私は病院に、賢慈を迎えに行った。

救助隊が着いた時にはぐったりしていたそうだが、おにぎりを六個食べてスポーツドリンクをがぶ飲みしたら、すっかり元気になったそうだ。

ホント、食いしん坊なんだから。

一応病院で検査したそうだが、異常は認められず、ただ空腹だっただけだとか。

今が夏だったのが幸いしたのかも知れない。服は濡れていたけど、日光で暖かかったらしいから。

いつもは恨み言を言う太陽にも、今日は感謝してる。

「あ、優美！こっちこっち！」

病院の前で、手を振る賢慈。たった数日ぶりなのに、かなり久しぶりな気がする。

「賢慈〜」

そう言って、私も手を振る。そして、ダッシュ！

「うわっ」

賢慈に抱きつくつもりが、そのまま押し倒してしまった。そしてそのまま、デープキス。

周りなんて見えなくて、“その人”に声をかけられて我に返ったとき、とっても恥ずかしかった。

【賢慈】

『帰ってきたら、キスで迎えてあげる』とは聞いていたけど、押し倒されてデープキスされるとは思わなかった。

優美がしてくるのは普通のキスで、僕からディープキスするつもりだったのに。

でも、優美からディープキスしてくる事なんて、滅多にないから、嬉しかった。……周りの人の視線が、恥ずかしかったけど。

ところで、声かけてきたこの人は、確か……。

【智春】

もう、優美ったら、人前でなんて大胆なことしてんのよ！賢慈は賢慈で、腰に手をまわしてるし！

「優美、イチャイチャするの帰ってからにしてくれる？」

私がそう言くと、二人とも真っ赤になって慌てて立ち上がった。

「智春！何でこんな所に！？」

ふっふっふー。ごまかそうたってそうはいかない。からかっちゃお。

「優美、ちょっと見ない内に大胆になったね。舌絡めてたの、見えてたよ？」

「そ、それは、その、あの、ちょっと訳有って、その……」

ふふ、真っ赤なのが更に真っ赤になった上に、しどろもどろになっちゃって、とーても可愛い！優美ったら、昨日とは大違いね。

昨日、私の探偵事務所に来たときには、悲壮な覚悟を決めたような顔だった。それが、今は元に戻ってる。

すっかり賢慈に依存しちゃってるわね、あの頃から。

高校二年の時、優美に好きな人の相談をされて、一肌脱いだ時の事を思い出す。

あ、いけない。優美達をからかうのが面白すぎて、今日来た理由を忘れてた。

「あ、そうそう。優美、昨日の、中止で良いかな？続けるの、無理になってるんだけどね、どっちにしろ」

優美の顔が、一瞬強張る。こわばしかし、直ぐに

「うん、それで良いよ」

と、答えが返ってきた。

不思議そうな顔をする賢慈には、本当の事は言えない。『女同士の内緒の話！』と誤魔化した。

「結婚式の日が決まったら教えてよね。じゃあ、またね！」
そう言って手を振ると、2人とも真っ赤になりながらも、手を振ってくれた。

【優美】

もう、智春ったら。

智春にからかわれたことを考えていると、ディープキスを思い出して、恥ずかしくなってきた。

でも、結婚式かあ。賢慈、どんな風にプロポーズしてくれるのかな？今から、楽しみ。

「あはは、久しぶりだったけど、智春さん元気だったね。」

「そ、そだね。でも、人をからかい過ぎ！」

ぷくーっと頬を膨ふくらます。すると私の顔を見て、笑い出す賢慈。

「もー何で笑うのよ！」

「ごめん、だって可愛過ぎ……」

……そんな事言われちゃったら、怒れなくなっちゃうじゃない。

「ありがとっ」

そう言って、賢慈の唇を、私のソレでふさぐ。そして、本日二回目のディープキス。

さっきは周りが見えなかったけど、今度は周りも見えてるから、

凄く恥ずかしい。

でも、何度も舌を絡め合っていた。私達を誰かが見つめているとも、知らずに。

その晩は激しくて、最後は失神しちゃった。

【賢慈】

次の日、会社に出勤した僕は、同僚にからかわれまくる破目になった。

どうも、誰かが僕達を見ていたらしい。ディープキスは勿論、優美が僕を押し倒した事まで噂うわさになってる。

しまいには、上司にまで『結婚式には呼んでくれよ?』なんて言われてしまった。

顔から火が出るほど恥ずかしかったけど、皆、僕達を応援してくれているのが分かって、とても嬉しかった。

ふと、智博の事が、脳裏に浮かんた。もし、彼が優美に特別な感情を抱いていなかったなら、どんな言葉をくれたのだろうか?

【智博】

俺は、自分のした事を全て認めた。

別に、罪を軽くしようだなんて、思っちゃいない。

ただ、女神の心に闇を作ってしまった自分が、許せなくなってきただけだ。

一体、どんな刑になるのだろうか。変な話だろうが、懲役ちやうえきだったら良いなと思う。

まだ、自分を抑えきれる自信が無いから。

恐らく、2人に会うことはもう無いだろう。

でも、賢慈なら、優美を幸せにしてくれる筈だ。

こんな、出来損ないの悪魔よりも。

そう考えると、何故か涙が出てきた。

優美が幸せになる事は嬉しい事なんだけど、俺が幸せにしてあげたかった。

たったそれだけだったのに、いつの間にか俺は歪ゆがんでしまった。

もう、あの三人で笑っていた頃には戻れない。

俺は一人、止まらない涙をぬぐい続けていた。

【優美】

時が経つのは早いもので、あの事件からもう半年が経った。

賢慈のおかげで、今は智博を許せるようになってる。

執行猶予がついたけど、あれから智博は私たちの前に姿を現していない。会社も辞めてしまったそうだ。

もう一度、話したい。時々、賢慈はそう話していた。

そんなある日、一通の手紙が届いた。差出人は……智博だ。

【賢慈】

智博からの手紙には、思い切って株の世界に入ったことや、案外株が合っているということ等が書かれていた。

そして、最後の文章。

『もう、あれから半年も経つんだな。最近、ようやく優美を友達として思えるようになってきたところだ。』

もう一度、友達になってくれないだろうか？』

僕達の答えは、決まっていた。

もう直ぐ、凍てつく冬は去り、優しさの春になる。そうすれば、また三人で笑うことが出来るだろう。

半年後にある、僕達の結婚式に、彼は来てくれるだろうか？

【智博】

今日は、賢慈と優美の結婚式だ。

俺が賢慈を突き落とした今日にしたのは、俺を許し、気にしていない事を示す為かと思っていた。

でも、実はそれだけではなく、この日は賢慈が優美に告白した日だかららしい。

そんな大切な日に、俺は賢慈を突き落としたんだと思うと、胸がチクチクと痛む。

でも、今日は賢慈たちに伝えなければいけない事がある。

それぞれの控え室から出てきた2人の前に、“俺達”は近づいて行く。そして――。

【智春】

「ども、智博の彼女の、智春ちはるです！」

そう言ったときの優美達の顔は、一生忘れないだろう。

一年前に調べていた頃の智博は、正直好きにはなれないタイプだった。

でも、半年前に再び見た時の智博は、何だか、かっこ良くなっていた。

行方をくらましていた間の事はあまり話そうとはしないけど、株の話をする時の彼は、とっても輝いている。

それから彼を好きになるのに、あまり時間は必要なかった。

そして、今日この日。2人に私達の事を伝えに来た。そしたら。

「いつの間に付き合ってたんだよ。知らなかったな」

「智春を泣かせたら許さないからね！」

と、笑い顔の2人。

それから式は順調に進み、いよいよブーケトス。

優美が投げた花束^{ブーケ}へ、手を伸ばし……。そして。

「良かったね、智春」

「私のブーケ、効果抜群よ！」

「智博、君達の結婚式に、僕達も呼べよ？」

私の手の中にある、幸福^{ブーケ}。そして、皆の笑顔。

この日は、私達四人にとって、決して忘れられない日となった。

【優美】

結婚式の晩。私たちは、ホテルの一室で、ワインを飲んでいた。でもグラスからじゃなく、口移しで。

「ほら、返杯は？」

ちょっと賢慈をからかうつもりで、口移しで飲ませたのに、賢慈
ったら何度も口移しで飲ませてきて、返杯も求めてくる。

「んん！」

返杯していたら、舌を絡めてきて、そのままベッドに押し倒され
る。

「ありがと、もうワインは良いよ。次は、優美を食べちゃおう」
そう言って彼は笑う。でも。

「もう何度も、食べてるじゃない」

「うん、でも今度は、本当に食べちゃうね」

一瞬置いてその意味に気付いた私は、真っ赤になって、

「バカ！」

と叫んだ後、小さく『……でも、良いよ』とつぶやくのだった。

|| || || END || || ||

(後書き)

30分の制限を口に出せないくらいオーバーしてしまいました。
すみません。

最後の『今度は、本当に食べちゃうね』は、もう避妊はせず、子作りしよう、という意味です。

空想科学祭にも参加しているので、そっちも楽しみにしてください。さい。

<http://sffesta2008.soragoto.net/>

では、またの作品で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9778e/>

私たちの想い【三語即興文：『詩』『憎しみ』『ハッピーエンド』】

2010年10月8日15時20分発行